レビュー

第3回「九州」半導体産業展（下）

学生参加者の意欲向上に貢献

次回は会場規模を拡大

9月30日～10月1日に開催された第3回「九州」半導体産業展の内容を詳述する本連載。後編では、毎年大盛況のセミナーや、併催された次世代エネルギー展などの内容を紹介する。

同展示会は、学生来場者への取り組みも注目を浴びている。学生の来場も例年より多く見受けられた。実際に、九州の学生の半導体への学習意欲は高まっているという。

ミニマルファブ推進機構は、20フィートコンテナ内でミニマルファブによる半導体製造プロセスの一部を行うことができる「モバイルファブ（Mobile Fab）」を活用した人材育成を提案した。佐世保工業高等専門学校や熊本県立技術短期大学校でミニマルファブを活用した学習プログラムの実績があり、これらの問い合わせは九州を中心に拡大しているという。「今回は学生の来場者が非常に多い。半導体の基礎から学びたいと意欲を示す学生数が増えている」と同機構の専務理事を務める齊藤氏は語った。



ミニマルファブ推進機構のミニマルファブ

毎年好評のセミナーでは、Rapidus㈱の橋本潔氏が、世界のロジック半導体が2nm世代に移行するなか日本の技術は40nmで止まっていると指摘し、「世界のリーダーに対し10年遅れている」と危機感を示した。また、先端半導体分野では世界規模で安定したサービスを提供する九州大学発のスタートアップ、EUVフォトン㈱は、EUVリソグラフィーの最新動向を紹介するセミナーで、各工程における現在の課題を紹介。自社で保有するEUV光源や、他企業や大学などとプライチェーンが求められ、日本も人材や開発・生産能力を取り戻す必要性があると語った。


セミナー会場の様子

EUV照射と解析評価の連携による幅広い光源での対応を強みに、材料メーカー各社の課題解決をサポートできるとした。今後は6・7nmや3・1nmの極端紫外光源への対応も視野に入れているという。また、同セミナーの冒頭では、九州大学の白谷正治教授が、日本企業の個社の強みを結集して連携した産業基盤を構築することが重要だと主張した。

複数社の協力が提唱されたが、出展ブースでも複数社で合同展示したブースが注目された。HPCシステムズ㈱のブースでは、検査装置向けの産業用コンピューターを核に複数社と共同出展を実施した。同社の産業用コンピューターに、㈱アバールデータの画像ソリューションやサンリオートメイション㈱製のchemSHERPA・SEMI F47対応製品、さらにエブレン㈱による多様なバックプレーンボードソリューションなどを搭載・連携させた事例を披露した。HPCシステムズは、これら各社の製品と技術を自社製品で統合して、装置開発を広く支援していく。


パナソニック環境エンジニアリングのガラス型ペロブスカイト太陽電池

さらに今回、マリンメッセA館では第1回「九州」次世代エネルギー展が併催された。そのなかでDOWAエコシステム㈱は金属や家電などのリサイクル事業を紹介した。特に来場者の興味を引いたのは使用済み太陽光パネルのリサイクルで、同社の九州拠点である熊本事業所でも今後力を入れるという。また、パナソニック環境エンジニアリング㈱は、ガラス型ペロブスカイト太陽電池などを展示した。建材ガラスにペロブスカイトおよび電極層を直接塗布・封止することで長期の発電が可能となる。さらに、会場外ではトヨタ自動車㈱の燃料電池バスと㈱本田技術研究所の可搬型外部給電器・可搬型バッテリーを組み合わせた移動式発電・給電システム「Moving e」などが注目を集めた。

第4回「九州」半導体産業展は、27年9月29～30日に開催される。マリンメッセ福岡に加え、今回叶わなかった近隣会場の使用による会場規模の拡大も予定する。そのほか東京や北海道での開催も控えている。

（日下千穂記者／石井大成記者）

（この稿終わり）